



素材と他者に着目した乳児期の 感触あそびの検討

山田真世（教育学部）



感触あそび



- 水や砂、新聞紙、小麦粉、片栗粉など幅広い素材を用いて、子どもの視覚や聴覚、皮膚感覚、運動感覚に働きかける遊び。

感触あそびの中で

- 素材の特徴や意味を知るだけでなく、自身の身体についての理解も深めていく（無藤, 2012）。
- 幼児の砂場遊びにおいて、砂と子どもとの関わりが変化し、子ども同士でイメージの共有がなされている（箕輪, 2006; 2011）。
- 感触あそびという文化的行為に参入する過程で、素材だけでなく、自分や他者についての理解も深めていることが考えられる。

乳児期の感触あそび



- 幼児期の感触あそびについての研究や、感触あそびの実践（実践に関する書籍や報告、教科書）は多数報告されているものの、乳児期の保育で実際に行われている感触あそびについての体系的な整理や考察は行われていない。→目的1
- 乳児期の感触あそびにおいて、素材を媒介に他者とどのようなコミュニケーションが生じているかについて実証的な研究が必要とされている。→目的2

本研究の目的



- 目的1
0～2歳児クラスの保育実践の分析を行い、保育で実際に行われている感触あそびの素材やねらい等について整理、考察を行う。
- 目的2
感触あそびの観察を行い、感触あそびの中で、子どもたちはどのように素材と関わっているのか、素材を媒介として他者とどのようなコミュニケーションが生じているのかを明らかにする。

※本研究について、具体的な内容は論文等での公表を予定しているため、以下概要を示す。

目的 I



対象

- 2015年から2024年の10年間に発行された『季刊保育問題研究』（全国保育問題研究連絡協議会機関紙）の「全国保育問題研究集会提案特集号」の分科会報告を対象とした。報告字数は各4000字程度であった。

- 方法

0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラスの感触あそびに関して言及のある実践を抽出した。素材や遊びの中での子どもの姿等についてカテゴリーを作成し、整理した。

I 歳児クラスの感触遊びの様子



私は高い所にも水を用意したいと考えて、大きな透明のポリ袋を切り開き長くつなげて透明のシートを作り、そこに水を溜めて子どもの頭ほどの高さに設置することにしました。普段はタライの中に入っていたり、ホースから出てきたりする水が、もし自分たちの頭の上にあったらどんな反応をするのだろうかと思身がワクワクしていました。

(略)

透明シートの上にホースから水を流すと、子どもたちは透明シートをつたって流れ落ちていく水に気がつき、容器にその水を汲み嬉しそうに遊ぶ姿をみることができました。

(略)

クラスで一番水遊びの好きなAくんは、一定の量に水が透明シートの上に溜まると横から一気に落ちることに気がつき、嬉しそうに水にかかりに行く姿が見られました。

0歳児クラスの感触遊びの様子



子どもたちには0歳児の間からたくさんの経験をしていってほしいと思っています。泥んこあそびや水あそび、さまざまな感触に五感で感じ、いろいろな感触にも慣れて「やわらかいなー」「冷たいなー」と子どもが楽しくあそびるあそびになるといいなと思い、取り組んできました。

低月齢の子どもたちは感触あそびが大好き！保育者が「準備できたよー」と伝えるとずりばいで自分からやってきてうつぶせの状態で絵の具や片栗粉などをペチペチとたたき、「あ！あ！」と楽しそうにしています。

高月齢の子どもたちはいろいろわかってきた分、始めは警戒することもありましたが、春からずっとしてきた絵の具は誰も嫌がることなく楽しく制作できています。

高瀬 (2017) p.59より抜粋

1歳児クラスの感触遊びの様子



感触あそびでは石けん・氷・くずきり・寒天・高野豆腐・小麦粉・片栗粉・こんにゃく・わかめなど取り組みました。

寒天…「ツンツンシテミル！」と指先で触ってみたり、手の平で寒天をつぶす。

片栗粉…水を加え体温でトローンとなると「オバケダゾー」と盛り上がりました。

氷…滑って逃げていく氷をつかもうとしていました。

子どもたちのなかには手が汚れたり、べとべとくっついたりぐによったした感触が苦手で手を洗いに行ったり、離れてみている子どももいました。“お友だちみたいにならなくていいかな？”と手を伸ばし触っていました。そしてあそんでいる姿を見ているうちに道具を使うと、かかわってみようとする姿もあり、ザル、洗剤のスプーン、おもちゃのバケツなど子どもによって楽しみ方が違ったのでその子の思いに寄り添い、無理強いせず楽しかった！と思える環境を作ってあげることが大事なのだと思います。

松井 (2015) p.241より抜粋

目的 2



- 1歳児クラスの感触あそびについて、X県の保育所1歳児クラスにて観察を行った。
- 調査対象園では、泥や砂を使用した感触あそびを0歳児クラスから日常的に行っている。調査者は子どもからの接触や呼びかけには応答を行うが、調査者から子どもたちに積極的な関与はしない形で、日常の保育場面に参加し、観察を行った。
- 本観察場面は、泥を使った感触遊びであった。観察観点は、子どもの素材へのかかわり方、遊びの中で他者（他児・保育者）に向けた行為や発話、相互行為であり、現在分析中である。

成果の公表状況



- 山田真世. (2024). モノを作ることの楽しさとは？—ゼロ歳児と五歳児の造形の姿から (特集 作って遊ぶって?) , ちいさいなかま : 保育者と父母を結ぶ雑誌 / 全国保育団体連絡会 (編) , 760, 34-41.

引用文献



- 松井絵美. (2015). 積み重ねを通して描画でつながる子どもたち. 季刊保育問題研究, 326, 240-243.
- 箕輪潤子. (2006). 幼児同士の砂遊びの特徴—ガーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—. 保育学研究, 44(2), 178-188.
- 箕輪潤子. (2011). 砂場遊びに関する研究動向と今後の展望. 川村学園女子大学研究紀要, 22(1), 197-204.
- 都瑞希. (2022). 子どもたちに発見のワクワクを：一歳児のかがかくあそびを通して. 季刊保育問題研究, 314, 235-239.
- 無藤隆. (2012). 保育実践と保育環境. 保育学研究, 50(3), 238-241.
- 高瀬歩美. (2017). 子どもの主体性を育てる環境作り. 季刊保育問題研究, 284, 58-61.
- 山下慶子. (2020). 五感をはぐくむ感触あそび！人やものと友だちになろう. かもがわ出版.



ご清聴ありがとうございました

ご意見、ご質問をいただければ幸いです。
よろしく願いいたします。

